

盤梯火山現狀報告(第一報、昭和六年九月提出)

福島測候所報告(同所技手柳谷喜太郎調査)

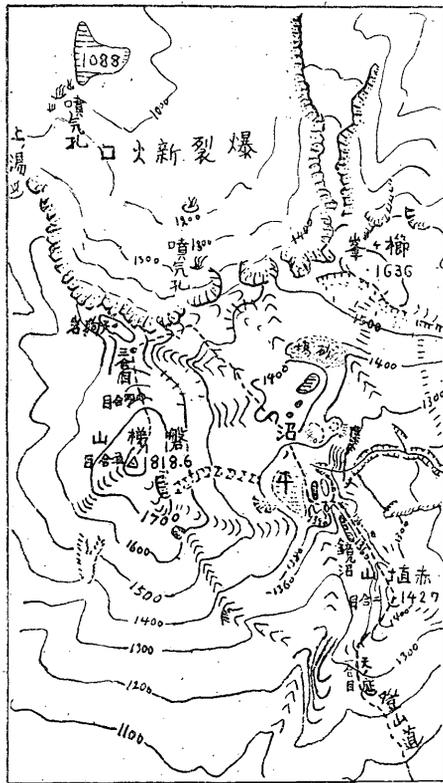
會津若松市に開かれた縣主催の夏期大學にお出でになられた藤原先生のお伴をして、猪苗代支所高子技手及郡山町小平醫師同伴八月二日盤梯登山をした、講演の御都合や汽車の都合で登山口土津神社を登り初めたのが既に午後二時半で終に頂上を極める事が出来ず、漸く明治廿一年爆發の噴火口に達したばかりで引き返したが其の後八月卅日有志登山の一行に加はり再度登山する事が出来頂上にも達した、併し初回も烟霧や霧が可成り深かつたし、殊に次回は五十米前殆んど不明な程度の濃霧が次々と續いた、従つて是から述べること通過した附近を主とし展望し得た範圍を従とし藤原先生の指導に従つて記述する。

登山口を二回共猪苗代即ち表盤梯に採つたので明治廿一年爆發の際も此の方面より、後に述べる天之庭方面迄は大なる影響なく少量の降灰を見た程度で従つて其の方面の地形は少なくとも大同元年即西曆八〇六年以前ののもので一般舊火山地方に見られる様に麓方面から中腹上腹迄よく地味肥え千二、三百米迄は一帶に雜木繁茂し、此の高さにおいても尙三米以上である。道は是等の雜木に蔽はれて居るので此方面は殆んど知り得ないが一合目天の庭に至つて突然雜木斷え見るから噴火の偉力を偲せる火山岩、巨大

なる塊状をなして累積し(寫眞參照)西方に連なる部分には纔かに五葉松大檜及ウラジロ、イフラク、オホゴメイツジ類の外イワキンバイ、イワヨモギ等の植物疎らに茂げる。然しこの方面は特に西風の卓越する所と見え樹木發生状態を見るといづれも極端に東方に片より西向きには全然枝葉を有して居ない、(寫眞第一參照)之等の岩石帯より西方に互る澤一帯には大松樹密生して居たとのことであるが、明治廿一年の噴火に際しこの方面にも大風起こり樹木はいづれも根こぎにされたとのことで、此の際この岩石帯も出來たとのことである。從て之等の岩石も比較的風雨化されて居ないが當時の松樹と見らるゝ、俤はない、此處は赤埴山の下腹を占める部分でこの頂上迄約拾町、二合目である、此の間所々には赤色の軟かい火山岩(赤色は火山岩の酸化作用の爲ならん)帯をなす所多く赤埴の名の由來も之れによるのであらうし、他の部分には一面に高山植物イワキンバイ、マルバシモヅケ、ミヤマノエンドウ、クロウスゴ、アキノキリン草、ウスユキ草の外山柳、クロヨソゴ及オホゴメツツジ、ウラジロイフラクのつづじ類等可成り密生す、是は海拔千四百二十七米の山で近い四圍には之に並ぶ程の山もなく其の東方に長瀬川の大きな谷を距て、安達太郎山天狗角力取山等の山彙と相對し、北西方に千八百十九米の大盤梯山、北方には千六百三十六米の櫛ヶ峯あり盤梯山系中の三大高山をなしこの中部に挟まれた部分は舊噴火口で沼の平と言はれて居る、此の火口縁となる部分で赤埴山の北に當り火口と反對の側には見かけ、數丈に餘一つの斷崖あり赤色の水平地層を示し、其の西部は鮮明な成層となつて居るし大盤梯のこの方面に向

ふ部分も殆んど頂上より全く懸崖的に削り去られ其の地色はいづれも赤色で其の南部分はやはり鮮明な傾斜成層となり、共に舊噴火の性質状態を論ずる好資料となる。

道はこの赤埴山の頂上から北西に折れ急傾斜で岩石の所々突出する部分を降り小さな尾根を通つて沼



の平の南部に出る、この方面は相當の鞍状部で右側は崩れで左側は草萱灌木等の生えた緩い谷間である。幾分北寄りの西側に道に沿ふて細長い沼あり。鏡沼と言つて居るが水は頗る澄み飲料水にも適する。前述赤埴山の東の谷は此の鞍部の東から北に達し、其谷底には沼の平から流下する小川があり、

此小川が小外輪を破る所は小峽谷をなし、其れを挟んで前記水平成層の崖が東に向つて立つ。この部分から沼平に連らなるには小坂を登り直立岩柱の傍を通り更に幾分降りとなるので餘程高目になつて居る、是より沼ノ平となるのであるが、其の北向きの小さな傾斜地は草丈も深く所々小沼(寫真第二)があ

り、赤其の色が赤褐色のもの黒色のもの等種々あり、水邊には菅草などが生へ又道の兩側は舊大火山の跡らしく大盤梯の東向きの大懸崖の直下に當り沼澤地をなし芦が密生して居る。此の噴火口も恐らく盤梯火山の或時期に於ける爆裂火口であつて山の肩を東に吹き飛ばして出來たものであらう。其邊から北、沼ノ平の稍中央は稍高目になり小さな東屋がある。其附近は疎な草地をなし名月草、ミヤマカウドリナ、イハキンバイ等の外種々の植物あり、植物採集者は北の邊に多くの植物を集めるらしい、此の邊より北東、沼ノ平の大部分は全然植物もなく一帯の平地で其の中央部は極く最近迄水を湛へたものらしく白褐色の沈澱土壤である(寫眞三參照)。新爆發に際しては泥水の一部は此處を流れ、小外輪丘を穿つて前記赤埴山の北方を繞る谷間に出で此谷を走り下つて猪苗代町の北方に當る見禰村を襲つた。其泥水の通路となつた部分である故、可成り迄舊態を變じたことであらうが、大體において舊大噴火口であらう、更に道は其の北西側から北西に折れ舊噴火口壁をなす、稍急な坂道(寫眞一の前景)となるが泥流に残された岩石は至る所に突出し纔かに植物生へる、これを登ぼりつめれば新噴火口縁南側に至る、この噴火口は以前小盤梯の在つた所であるが噴火に際し、其の略々全體を失ひ南、西東の三方に噴火壁を有する馬蹄形のもの(寫眞五、六、七及八)で西は大盤梯より北西に走る尾根に限られ、東は櫛ヶ峯(寫眞四)中腹を破壊し(寫眞五)南は鞍狀部によつて舊噴火縁に連らなり、此の邊爆發壁の高さ略十米以上で絶壁をなす、南西部の壁は更に高かく其の南西部一端には天狗岩(第二報寫眞第一)巍然とそびえる、之等壁

をなす部分は熔岩質のものでなく、火山岩屑礫及火山灰の積堆によるものらしく南側の略、中央部で壁の稍、入込む下底には硫氣孔が(第二報寫真第二)あり、近よらぬ故確かには判らぬが多分硫氣孔であらう、今尙盛に蒸氣を噴出し天氣の爲か地熱の爲か次回に見た時は噴出量稍、大なる様に觀測された。更に此處から北西部に當り天狗岩の北方の壁からも蒸氣噴出の箇所接近して三箇所あり、此處は多分上ノ湯温泉のあつた附近だらう。

噴火底一帯は略、平らかに北に向つて緩かな傾斜をなし、爆發當時泥水岩石を遙か北方まで放流し、長瀬川を堰止めて松原湖、吾妻湖、小野川湖等を形成したものであるが、これ等よりも尙近くに數多の小沼あり、硫黄分その他の含有物の爲であらうか之等の沼は瑠璃色、青色、赤色と種々雜多の色彩を放つて居るし、今も尙その當時の泥水、岩石流出の状態を残して居るが、噴火口の限界となる部分は北方では認められない、然も此の噴火底一帯には全然草木が生じて居ない、赤埴山よりこの火口南側まで約十三町それより道は西に折れ次第に嶮しく三町程先の三合目近くで、更に南に折れて居るが此の方面迄は噴火の影響か岩石も多く植物も疎らにしか生えて居ない、それより先は全山殆んど黒色の肥沃げの土壌で、イワヨモギ、スギゴケ、山イチゴ、コケモモ、アキノキリンソウ、アキカラマツ、タカネアザミ、ヘビノネコザ、タカネオトギリソウ、ミヤマヤマブキシヨウマ、ノウゴイチゴ、ミヤマウグイスカヅラ、ヤマハハコ、カエデ、マルバシモヅケ、ダケカンボ、ウドモドキ、小笹、カハラナデシコ、月見草、ム

ツノカリヤス、桔梗等一面に密生し登山道の凹地に纔かに岩石を露出して居るに過ぎない、三合目から五町半登れば弘法清水と云ふ冷水があり實に冷い、溫度を測ればよかつたと思つたが當時はその思付さへ出なかつた、此處は四合目で更に五町半登れば愈々頂上五合目であるが、此の途中は最も險しい急坂となつて居る。頂上は疊十疊に余る廣さに岩石露出累積し、稍々圓形の平地となつて居るがその他は一帯に前述の様な植物が繁茂し、山全部としては南側は登山道だけに他に比べて幾分緩かではあるが大體としては可成急な圓錐形をなし、その一部東部は殆んど頂上の一隅より直下に斷崖となつて削り取られて居る。前述の盤梯の斷崖として述べたものではあるが、四方多く霧にとざされこの斷崖も單にその一部分を瞥見し得るに過ぎなかつた、只此處から北方に當り天狗岩附近は正しく小盤梯の南部をなした一部であるだけは確めるを得た。

追筆 四合目に當る弘法清水は昭和七年八月七日で五度〇分あつたところから、二町程下にも冷水湧出の所がある水量では弘法清水より多量で水温は五度一分である、之は多分昨年か今年中に設備したものらしく新弘法清水とも言ふことであらう。

附記 磐梯山に關しては震災豫防調査會報告第八十六卷日本噴火志上編第三十表同第八十七號噴火志下編十一頁に尤も重要な記事があり、皆大森博士の大正七年の報告である。が材料は總て東洋學藝雜誌第八十五號八十六號關谷博士論文より取られたものである。此れは明治二十一年十月七日東京に於て大學通俗講談會に於ての講演の筆記であり、關谷博士は磐梯山が同年十月十五日噴火後大學より調査の

爲に出張せられ、右講演は其調査の概要で有る。其れによると沼の平及全山爆發以前は大木が茂り、沼の平には五六個の沼が有つたが大木は皆倒され埋められたと云ふ。又沼の平は大昔の火口であると云ふ見解を持つて居られる。噴火の際の土砂流出の範圍を示す地圖を添へて居る。夫れに依ると北方への崩壊と同時に沼の平へと土砂を押し出し其の半を埋めハサミタ、タキツキ澤、トカケ澤、ビハ澤に流下し見稱を埋めたと云ふ。此地圖では細かい地形は不明であるが、陸地測量部の明治四十一年製圖の五萬分一地圖に依れば、略々現今の状況と同じで又植物狀態も似たものである。只通路の記入がない。恐らく此通路は近年登山が盛になつてから出来たものであろう。地形から見又便宜から見て天の庭から赤埴山へ登らずに横道を鏡沼に出る道と沼の平側から噴火口へ下る道と、及大磐梯の頂上から鏡沼の西へ尾根傳ひに昇り降り出来る道とが出来たら登山者の爲には甚好都合となる事と思ふ。

沼の平は圖に示す通り、中央に平行な千四百米等高線によりて示される小し小高く盛り上つた所があり、夫れに依り北部南部に分たれ、其西は大磐梯の急な崖が屏風の様にとり北東に櫛ヶ峯があり、北側は鞍部となり噴火口に連なつて居るが、其鞍部の櫛ヶ峯寄りの方が特に低く裸山となり、明治二十一年七月の土砂の押し出した通路を今も尙明示して居る。其南東で櫛ヶ峯の裾に平らな砂場があり上から眺めた所では、輕飛行機位は發着出来るかと思はれる位の廣さがある。其砂場の東から鏡沼の北迄小山が沼の手を縁取つて居る。此小山の東側を赤埴山の方から眺めると水平な層を示した懸崖が見へる。遠く

から見たので眞に水平成層か否かを確定した譯ではないが、水平層らしく見へるので、一見奇異の感を懐く。前に小藤教授も明治二十一年頃示された様に此磐梯火山は成層火山ではあるが、其成層は山の測面では錐狀成層をなし傾斜して居るが普通と思ふ。現に沼ノ平の南部から西に見る大磐梯の崖の中には斜な錐狀成層が明瞭に見られる。恐らく此小外輪丘外面の水平成層は昔し赤埴、大磐梯櫛ヶ峯を連ぬる大火山の中心に今の沼の平と相似た更に廣大な沼の平があり、其所に水平に堆積した成層が其後の爆發によりて其東半を失ひ、其斷崖を露出するに至つたものでも有ろうか。大磐梯自身迎も、恐らくは元來更に圓錐形をなしたもので、或爆發により其東半を失つたものらしく其爆裂火口は今の沼の平の南部の芦沼附近でもあつたらうか。

磐梯山は歴史に徴すれば約千年を距て、再度大爆發をしたものであるが、附近の吾妻山、安達太郎山、藏王山等は頻々と活動して居るので、此山として今後千年は安定と速斷は出来ない。故に附近の火山と共に時々其現狀を調査して置く事は必要である。夫れに就き大噴火後數年間の状態は猪苗代町小林榮氏の數度の報告あり、其當時は新噴火口には尙數十條の噴煙を揚げ、倒木等尙壘々として居たものゝ由であるが現今では木などは更に見へず、噴煙は僅かに四條を算へるのみである。近來は登山客多く土地の人には山の現狀は餘りに明白にして却へつて記録が無い。故に此福島測候所の報告も極めて機宜に適したものとと思ふ。次に高山威雄氏調査磐梯山文獻表を附加する。

雜誌名	卷	頁
地學雜誌	一	一九、二六、二二一、五三一
〃	三	三九〇
〃	一五	七七一、八三二
地質學雜誌	二四	三四〇
氣象集認	七	三八、二〇六
〃	九	四五五
〃	十	三九五
東洋學藝雜誌	五	三五〇、四一三、四五一、四九三、四九九、五一四、五一五、五二九
〃	六	二〇四、三一四
〃	七	二七二
〃	八	三〇五
〃	九	二一三
地理教育	二	

此外震災豫防調査會報告第八六號八七號、官報明治二十一年九月二十七日に重要記事あり、(中央氣象臺 藤原咲平)